大悲山観音寺と仏海上人

村上市の中心部にある大悲山観音寺は、日本最後の仏教ミイラ、即身仏である仏海上人の終焉の地である。

仏海上人は 1828 年に近藤庄次郎として生まれた。16 歳のときから修行に励み、村上の北に位置する山形県の湯殿山にある真言宗の寺院に弟子入りした。湯殿山は真言密教の一派の中心地であり、現世成仏を目指す修行を信奉している。真言宗の教義では、遠い未来に悟りの世界をもたらすと予言されている弥勒菩薩の到来を待つ間、信者は自分の肉体を保持したまま仏になることができる。

現世での成仏は、10 年もかかるとされる自己ミイラ化によって達成される。即身成仏を志す者は、腐敗しやすい組織を取り除くため、穀物や脂肪源を一切摂らないという極めて厳しい食生活を送る。代わりに野生の植物、葉、樹皮、根を食べ、体内の水分を最小限に抑えるために漆の樹液から作られた毒茶だけを飲む。漆は徐々に内臓をコーティングし、防腐剤の役割を果たした。

修行者たちは時が来たと感じると、小さな石の棺に身を包んだ。蓮華座に座り、呼吸が止まり

心臓の鼓動が止まるまで深い瞑想状態に入る。

仏海上人は 1903 年にこの最後の一歩を踏み出し、3 年後に弟子たちに遺体を取り出すよう求めた。しかし、即身仏の修行を阻止する政策の一環として定められた 1868 年の「墳墓発掘禁止令」が死体の発掘を違法としたため、彼らは仏海上人を発掘できなかった。ミイラは 1961 年に研究者グループによって掘り出されるまで地中にあった。

仏海上人の遺体と納められた棺は、大悲山観音寺で見ることができる。